

宗祖親鸞聖人に遇う

古田 和弘

目次

表紙デザイン 浜口彰子

## 一、祖父の「御開山聖人」

- 出遇うということ…………… 1
- 学術や教養の対象としてではない出遇い…………… 4
- 祖父の姿をとおして…………… 12
- 祖父の「御開山聖人」…………… 18
- マルクスさんは聞法が足らん？…………… 26

## 二、釈尊をめぐつて

- 仏教の学問の本質とは…………… 30
- 釈尊をめぐつて…………… 32
- 釈尊は私のために生まれ、私のために仏に成られた…………… 38

## 三、親鸞聖人に遇うということ

- 菩薩とはどういう人なのか…………… 40
- 菩薩は何を為すべきか…………… 46
- 菩薩の願い…………… 50
- 親鸞聖人が仰がれた釈尊…………… 55
- 「おまかせする」ということ…………… 60
- 一直線につながる念仏の伝統…………… 65
- 「愚禿釈親鸞」の名告り…………… 69
- 親鸞一人がためなりけり…………… 74
- なぜ私のために教えがあるのか…………… 79

## 一、祖父の「御開山聖人」

### ■ 出遇うということ

みなさん、こんばんは。「宗祖しゅうそとしての親鸞しんらん聖人しょうじんに出遇であう」という課題をいただきました。これはたいへん重たい問題であろうかと思いません。この課題をいただきましたから、私自身も宗祖としての親鸞聖人に出遇であわせてもらうということはどういうことなんでしょうか、どうすれば出遇であうということになるんだろうかというようなことを、あれこれ思い巡めぐらせてきたことでもございますが、この現代の社会においては「宗祖としての」というところが非常に曖昧あいまいになってしまっておること

も言わなければならぬと思います。それから「親鸞聖人」という言い方も、これも月並みな言い方ではありませんけれども、非常に曖昧になって、どういうレベルで親鸞聖人というお名前を我々が口に行っているのかということも、重大な問題であるかと思えます。さらに「出遇う」ということになってまいりますと、これはまたたいへんに大きな問題になると思います。

これは一つの理屈にすぎないかもしれませんが、デアウというときにいくつかの漢字の書き方がございます。一つは「出会う」、一つは「出遇う」、一つは「出遭う」。いろいろ言い方はあると思いますが、私がこれまでいろいろな先輩の方々のお書きになられたものとか、そういうものを見てきたかぎりでは、デアイというときに、特にいちば

ん象徴的なのが親鸞聖人と法然上人の出遇い、それがたいへん象徴的だと思えます。その場合に「出遇う」という字を使うケースが多いんじゃないかと思えます。それはそれでたいへん意味のあることじゃないかなと思います。

「出会う」というのは、これはある意味では計画できるわけです。計画的に予定を立てられるという、そういうことがあります。が、「出遇う」というのは「遇縁ぐうえん」という言葉が使われますが、これはもうたまたまのことです。たまたま縁あつて出遇うということになると思います。「出遭う」は遭遇するわけだから、思いがけないことだということになるかと思えます。

ですから、私の知るかぎり、先輩の方々がデアイとかデアウとかとい

う言葉をお使いになってこられたときに、多くの場合は「出遇う」という文字を選んで使っておられるように思います。それはそれで配慮が行き届いているというか、意味のあることじゃないかなと思っております。

### ■ 学術や教養の対象としてではない出遇い

そこですで「宗祖に出遇う」ということはどういうことなのか、「親鸞聖人に出遇う」ということはどういうことなのかということがあります。もう一つよく耳にするのは「親鸞に出遇う」という言い方もあります。「親鸞聖人に出遇う」という言い方と「親鸞に出遇う」という言い方、これは同じじゃないかといえは同じかもしれませんが、これは日本人の良さだと思っんですけれども、そこになにか託されたちよつとし

た思いが、違いがあるように思います。単に親鸞聖人に出遇うという言い方、単に親鸞に出遇うという言い方、同じことのようにありますが、なにかそこにひとつの思いというものが通っておるような気がいたします。

私は京都の大谷大学で長く勉強させていただきました、研究者として長い年月を勤めさせていただいてまいりましたが、そのなかでいつも考えさせられるというか、ひとつの行き詰まりといいますか、そういうことを感じてきましたのは、仏教なり真宗の教えというものを学ぶときに、いわゆる他の諸科学と同じでいいのかどうかということがあるわけです。科学的に、学術的に仏教なり真宗なりを学ぶというときには、これは問題をきちんと対象化するということが必要になるわけです。ですからそ

のときには、もうすでに「親鸞聖人」と言ってしまうと、そこにひとつの価値観が入ってしまいますから、それは学問的ではないんじゃないか、実証的ではないんじゃないかと、そういうような言い方ができるわけ  
す。

しかしだからといって、それじゃあ親鸞という方を我々の知的な営  
みの対象にすることだけで、それで真宗の教えを学んだことになるのか  
ということが一方にあるわけです。そもそも親鸞聖人の在り方というも  
のが、学術とか、そういうものの対象として百パーセントぴったりとし  
てくるのかどうかということが問題になると思うんですが、そのへんで  
いつもモヤモヤとしたものを感じながら過ごしてまいりました。「宗祖  
としての親鸞聖人に出遇う」ということを考えるときに、そのことがや

っぱり問題になってくると思います。

それはなにも親鸞聖人に限ったことではありませんで、例えば仏教の  
研究の場合には、なんといったって釈尊しやくそんの問題になるわけです。です  
から知的な営みとして親鸞聖人を考え、知的な営みの対象として釈尊を  
考える場合は、親鸞というふうに言えはいいわけだし、釈尊なんて言う  
必要はないわけで、ゴータマ・ブツダとかゴータマ・シッタールタとか  
言えば、対象として充分に学術的な意味を表すことができるわけです。

今日、日本の国の宗教界と申しますか、そのへんのところでも少し混乱  
があるということを感じておりますが、それはすでに仏教なり真宗とい  
うものを学術の対象としているということが、あまりにも無反省に拡大  
してしまっただんじゃないだろうかということを思います。